

『瑜伽師地論』「菩薩地」における 如来の十力の研究(2)

——和訳と註解——

那 須 円 照

序

この論攷では、前稿（『『瑜伽師地論』「菩薩地」における如来の十力の研究(1)——和訳と註解——』『仏教学研究』第66号所収、平成22年3月15日発行）に引き続いて、『瑜伽師地論』「菩薩地」（*Bodhisattvabhūmi* [BBh]）における、仏陀（如来）の不共の智力である仏の十力の中の残りの四つの力について明かした箇所を和訳し、それに対する『サーガラメーガ（Sāgaramegha）の註』（『瑜伽行地中菩薩地解説』（*Bodhisattvabhūmivākyā* [BBhVy]）と『瑜伽論記』のコメントを註記して検討する。残りの四力は、(7)遍趣行智力と(8)宿住随念智力と(9)死生智力と(10)漏尽智力である。

前回に引き続いて、これらの辞書的な意味（『仏教学辞典』（法蔵館）参照）を述べておく。

(7)遍趣行智力とは「如実に人天等の諸の世界に趣く行の因果を知る力」である。

(8)宿住随念智力とは「如実に過去世の種々な事を憶いだし知悉する力」である。

(9)死生智力とは「如実に天眼をもって衆生の死生の時や未来生の善悪の世界などを知る力」である。

(10)漏尽智力とは「自らすべての煩惱が尽きて、次の生存（後有）を受け

ないことを知り、また他のものが煩惱を斷ずるのを誤らずに知る力」である。

以上の力の内、最初の三力は、『瑜伽師地論』『菩薩地』では、仏のそれらの力が優れていることの内容を述べており、あまり利他的な面の考察はないようである。ただし、最後の漏尽智力に関しては、自ら証得し如実に了知し、他の者たちのために願うという、自利利他の側面が強調されている。

大乘論典の中で、十力について詳しく述べた点について、『瑜伽師地論』『菩薩地』と双璧をなす『大智度論』では、前回検討した、処非処智力(＝是処不是処力)と種種界智力(＝性智力)で衆生済度ということが述べられ、漏尽智力で自他の煩惱の斷滅ということが述べられる。また十力のまとめの箇所では、浄土教的な考えにつながる表現もみられる。『大智度論』においては、特に利他的な面が強調されているのである。

前回と今回、そして次の最終回に続く訳註研究は、十力について詳しく述べた大乘論典の中で、利他的な面の記述は少ないが、サンスクリット語原典が残る『瑜伽師地論』『菩薩地』という貴重な論書を扱うという点で、大いに価値があるであろう。今回は、前回と方針を変えて、チベット語訳で残る註と、中国撰述の註を、達意的に紹介するというのではなく、逐語的に和訳し紹介することにした。

以下の訳註研究で、果分不可説の仏の力とはどのようなものかということが少しでも分かっていたいただければ、本論攷の目的は達せられたことになるであろう。

今回は、最終回として(3)十力全体の七門分別を扱う予定である。

該当箇所(『瑜伽師地論』『菩薩地』 *Bodhisattvabhūmi* (BBh) {荻原 [1971]: pp. 389-392, Dutt [1966]: pp. 268-271}, 『サーガラメーガの註』(『瑜伽行地中菩薩地解説』 *Bodhisattvabhūmivivākhyā* (BBhVy) {Peking. No.5548: [Ri.405.a.4-410.a.6]} {Derge.No.4047: [Yi.322.b.2-326.b.5]}}, *Bodhisattvabhūmi* (BBh) & *Bodhisattvabhūmivivākhyā* (BBhVy) {磯田・古

坂 [1995] : pp.358-375, 377}, 『瑜伽論記』大正42. p.583. c-584. b)

2-1-2-7. 遍趣行(道) 智力を明かす

teṣāṃ evāvatāramukhānurūpā pratipat tadyathā rāgacaritānām aśubhā vistareṇa tadyathā śrāvakabhūmau sarvatragāminī pratipad ity ucyate. aparāḥ paryāyaḥ. sarvā paṃcagatigāminī pratipat sarvatragāminī ucyate. aparāḥ paryāyaḥ. parasparaviruddheṣu nānāpakṣāśriteṣv anyonyadṛṣṭirucivipratyanikavādiṣu prthag ito bāhyakeṣu śramaṇabrāhmaṇeṣu yā pratipat sarvaprakārair ihāmutrānavadyagāmnī. sā sarvatragāminī ucyate tadyathā kālāmasūtrādiṣu.

(BBh荻原 [1971] : p.389. ll. 2-10 ; Dutt [1966] : p.268. ll.14-19 ; 磯田・古坂 [1995] : p. 358. ll. 1-30)

まさに彼らにとって、趣入門のような行(道)がある。例えば、食行者たちにおいて不淨〔観〕がある、云々。⁽⁴¹⁾例えば、『声聞地』において遍趣行(道)と言われる。また、観点がある。すべての、五趣に趣くという行(道)がある。⁽⁴²⁾遍趣と言われる。また、観点がある。相互に矛盾する種々の党類に依存する各々異なる見と欲と諍論等の各々異なるこれとは外の沙門・婆羅門における行(道)が、すべての種類としての、この世と他の世の無罪の趣であり、それが遍趣と言われる。⁽⁴³⁾例えば、カーラーマ経等におけるよう⁽⁴⁴⁾に。

2-1-2-8. 宿住随念智力を明かす

vicitreṣu sattvanikāyeṣu tadyathā pūrveṣu dakṣiṇeṣu uttareṣu paścīmeṣu nānānāmasaṃketavyavasthānabhinneṣv aṣṭāsu vyavahārapadeṣv anugataṃ pūrvakeṣv abhyatiteṣv ātnabhāveṣu ṣaḍvidhaṃ samāsataś

caritam anusmaraty anekavidhaṃ pūrve nivāse samanusrājan. aṣṭau vyavahārapadāni katamāni. evaṃnāmā evaṃjātyaḥ evaṃgotraḥ evamāhāraḥ evaṃsukhaduḥkhaḥpratisaṃvedī evaṃdīrtghāyuḥ evaṃcirasthiti kaḥ evamāyusṃparyanta itī. ṣaḍ vyavahārapadacaritāni katamāni. āhāvānāya saṃketāḥ kṣatriyādayo varṇāḥ mātāpitarāṃ bhojanapānāvidhiḥ vipattisaṃpatti āyurvaicitryaṃ ca. tathā hi loka etāny aṣṭau vyavahārapadāny upaśritya ṣaṭcaritāni pareṣāṃ ātmano vā vyapadiśanto vyapadiśanti. idaṃ me nāmāsyedaṃ nāmeti. kṣatriyo 'ham ayaṃ vā. brāhmaṇo vaiśyaḥ śūdro 'ham ayaṃ vā. ayaṃ me pitā asya vā. yathā pitā evaṃ mātā. evaṃrūpaṃ ahaṃ āhāraṃ āhārami. manthāṃ vāpūpān vā odanakulamāṣaṃ vā. pare vā. evaṃrūpe ahaṃ vyasane saṃpadi vā vartate. ayaṃ vā. evaṃrūpe 'haṃ vayasī vyavasthito nava vā madhye vā vṛddhe vā. ayaṃ vā. ity etāni ṣaḍ aṣṭavyavahārapadānugatāni caritāni bhavaṃti. nāsti cāta uttari vyavahārapadaṃ tac caritaṃ ca. tasmād etāvad evānusmarati nāto bhūyaḥ. tatra vyavahāracaritāny ākāro vyavahārapadāny uddeśaḥ tasya cānusmaraṇāt sākāraṃ soddeśaṃ anusmaratīty ucyate.

(BBh 荻原 [1971] : p.389. l. 11- p. 390. l. 10 ; Dutt [1966] : p. 268. l. 20-269. l. 12 ; 磯田・古坂 [1995] : p. 360. l. 1-p. 364. l. 30)

種々の有情の集まり、つまり、東・南・北・西の種々の名称の約束の確定によって区別された、八つの言説の依り所に随順して、先の過去の自体において、六種の行を略して、随念し、多種の〔行〕を、宿住において随念する。八つの言説の依り所とは何か。以上のような名であり、以上のような生類であり、以上のような種姓であり、以上のような飲食であり、以上のような楽・苦の知覚であり、以上のような長寿であり、以上のような久住であり、以上のような命終である、と。⁴⁹六つの言説の依り所の行とは何か。呼ぶことのための約束であり、クシャトリア等の類であり、母と父であり、飲食の方

法であり、不幸と幸福であり、寿命の多様性である。⁽⁶⁶⁾すなわち、世間において、これらの八つの言説の依り所に依存して、六種の行を他と自のために説く。これは、私の名であり、これは彼の名であると。彼や私はクシャトリアであり、あるいはバラモンであり、あるいはヴァイシャであり、あるいはスードラである、と。これは私の父であるか、彼の父である。父のように母もそうである。私はこのような飲食を食する。酪漿、あるいは小さな円いケーキ、あるいは飯や粥を。あるいは他の者たちもである。私はこのような種類で、衰えたり栄えたりする。彼もである。このような種類で、私は年齢において確立される。少、あるいは中、あるいは老と。彼もである。以上、これらの六つの八つの言説の依り所に随順する行がある。それを越えて、言説の依り所や行はない。それ故に、この限りにおいてのみ、随念する。それより多くはない。その中で、言説の行は形象であり、言説の依り所は指摘である。また、これに、随念があるから、形象を伴い、指摘を伴い、随念すると説かれる。⁽⁶⁷⁾

2-1-2-9. 死生智力を明かす

tatra divyo vihāro dhyānānity ucyamte. tadāśritatvāt tasya cakṣuṣas tatphalatvāt tatparigṛhītatvād divyaṃ cakṣur ity ucyate. suparipūrṇa-apariśuddhadhyānaphalatvāt suviśuddham ity ucyate. manuṣyāṇām aṃtato nāmavaidharṃyād atikrāṃtamānuṣyaka ity ucyate. asti ca kāmāvacarāṇām devānām upapattipratilambhikam api tāvad divyaṃ cakṣus tan nāma sādr̥śyānuvartī. manuṣyāṇām punas tad api nāsti.

mriyamāṇāḥ sattvā vyayamānā ity ucyamte. aṃtarābhavasthā utpadyamānā ity ucyamte. dvābhyām ākārābhyām tamaḥparāyaṇānām ayam evaṃrūpo manomayo 'ntarābhavo nirvartate. tadyathā kṛṣṇasya kutapasya nirbhāso 'ndhakāratamīśrāyā vā rātryāḥ. tasmād durvarṇā ity ucyamte. ye punar dvābhyām ākārābhyām jyotiṣparāyaṇāḥ. teṣām

ayam evaṃrūpo manomayo 'ntarābhavo nirvartate. tadyathā jyotsnāyā
rātryā Vārāṇaseyakasya vā saṃpannasya vastrasya. tasmāt suvarṇā ity
ucyaṃte. tatra ye durvarṇāḥ. te hināḥ. ye suvarṇāḥ. te praṇītāḥ. ye
hināḥ. te durgatigāmināḥ. ye praṇītāḥ. te sugatigāmināḥ. sasamutth-
ānayā śilavipattiyā kāyavānmanoduṣcaritena samanvāgatā ity ucyante.
dvidvidhayā mithyādarśanadr̥ṣṭivipattiyā samanvāgamāt sarvāpavādi-
kayā tanmatavipakṣ'āvasit'āryāpavādikayā ca mithyādr̥ṣṭayaḥ āryāṇ-
ām apavādakā ity ucyamte. tayā mithyādr̥ṣṭyā mithyā hetuṃ phalaṃ
cābhiniveśate. tatas tatpratryayaṃ mithyākarmābhisaṃskaroti mithyā-
karmābhisaṃskurvan yad idaṃ dharmasamādhānam pratyutpannasuk-
ham āyatyāṃ duḥkhavipākam. yad vā pratyutpannaduḥkham āyatyāṃ
api duḥkhavipākam. tat samādatte. tasmān mithyādr̥ṣṭikarmadhar-
masamādhānahetor ity ucyate. samanvāgatasyāpi tadanyair anekavidhaiḥ
kuśalair dharmais tenaiva durgatigamanāt taddhetos tatpratryayaṃ ity
ucyate. nāmarūpānyonyaviśeṣāt kāyasya bheda ity ucyate. sarvamarāṇ-
ānāṃ nihinaparamatvād asya paraṃmaraṇād ity ucyate. narakāṇāṃ
saṃjñā vibhāvanatayā 'pāyadurgativinipātā ity ucyamte. svabhāvaśa-
rīravastuvibhāvanatayā narakā ity ucyamte. tatrāpayānam ity ucyate
adharmacaryāviśamacaryā. tayā tatra yānam bhavati. tasmād apāyā ity
ucyamte duḥkhasaṃsparśatvād dīrghakālikavicitrativranirantaradu-
ḥkhopabhogasamudgatatvād durgataya ity ucyamte. adhobhāgāvasth-
itavān mahāprapātabhūtavāt kṛcchrakarūḍḍānamahāvipralāpapra-
lāpitvād vinipātā ity ucyante. adhimātrasaṃvegajanakatvān narakā
evocyamte. ity yena copapadyante. upapannaś ca yad upabhumjate
tadupabhogāc ca punar yad anyat svayaṃkṛtaṃ duḥkhāṃtaram abhinir-
vartayamti. tad etad ābhiḥ saṃjñābhiḥ paridīpitaṃ. etadviparyayeṇa
yathāyogaṃ sarvaḥ śuklapakṣo veditavyaḥ. tatrāyaṃ viśeṣaḥ. sucar-
itaḥpūrvā gatiḥ sugatir ity ucyate. sukhopabhogaparavāt svargaloka ity

ucyate.

(BBh 荻原 [1971]: p. 390.l. 10-p. 392.l. 7; Dutt [1966]: p. 269.l. 12-270.l. 19; 磯田・古坂 [1995]: p. 365.l. 1-p. 374.l. 11)

⁽⁴⁸⁾この中で、静慮は天住と言われる。その眼はそれ(天住=静慮)に依るから、その果であるから、それに包摂されるから、天眼と言われる。⁽⁴⁹⁾極めて円満であり、清浄である静慮の果であるから、極めて清浄であると言われる。人々の中で、全く名称が相似していないから、人を超過した者であると言われる。⁽⁵⁰⁾欲界の天の中で、生得の、乃至、天の眼がある。その名は相似している。⁽⁵¹⁾しかし、人々の中では、それ(名)もない。

有情たちは、臨終のとき、死につつあると言われる。⁽⁵²⁾中有にあるとき、生じつつあると言われる。⁽⁵³⁾二つの種類に基づいて、黒闇に趣く者の中で、この以上のような類の意生(意成)、中有は完成する。例えば、黒い羊毛の光、あるいは、陰闇の夜のように。それ故に、悪い色と言われる。しかし、二つの種類に基づいて、明白に趣く者、それらの中で、この以上のような類の意生(意成)、中有は完成する。⁽⁵⁴⁾例えば、月の夜や、バーラナシーの極鮮白の(完全な)衣に属するもののよう。それ故に、好ましい色と言われる。この中で、悪い色を有する者たちは、劣である。好ましい色を有する者たちは、⁽⁵⁵⁾妙である。下劣なものたちは、⁽⁵⁶⁾悪趣に行く者たちである。勝妙な者たちは、⁽⁵⁷⁾善趣に行く者たちである。戒を壊し[それから]引きおこすことを有する者たちは、身・語・意の悪行を具有している者たちと言われる。⁽⁵⁸⁾二種の邪見と壊見を具有することに基づいて、すべてを誹謗し、彼に対して認められた異類に住する聖者を誹謗して、邪見が聖者への誹謗と言われる。⁽⁵⁹⁾その邪見によって、邪因・[邪]果に執着する。それ故に、それ(邪見)を縁として、邪業を造作する。邪業を造作するから、およそ、この法受があり、現在の樂があり、⁽⁶⁰⁾未来に苦の異熟がある。あるいは、およそ、現在の苦があり、未来にも苦の異熟があり、それを受ける。それ故に、邪なる見が業と法を受ける因としてあると言われている。それ(邪見・壊見)とは別の種々の善法を具有

していても、ただそれ（邪見・壊見）だけによって、悪趣に行くから、それを因として、それを縁として、と言われる。名と色とが更互⁶⁰に乖離するから、身の破壊と言われる。⁶²すべての死の中で、この〔死〕が最も下劣であるから、極死に基づいて、と言われる。地獄の想を開示することによって、⁶³險悪趣に墮ちると言われる。⁶⁴自性と体と事とを開示することによって、地獄と言われる。その中で、⁶⁵險と言われる。非法行と不平等行、それによって、そこ（地獄）に行くことがある。それ故に、⁶⁶險と言われる。苦触に基づいて、長時、種々の猛利なる無間の苦悩を受けることが平等に出現するから、悪趣と言われる。⁶⁷下分に位置し、大深坑のようであるから、救拔しがたく、あわれむべき、下賤なる、大きな綺言と悲嘆に基づいて、墮ちると言われる。上品を厭離することを生じさせるから、地獄とのみ言われる。⁶⁸また、以上、ある者が生じる。また、生じおわた者は〔苦悩〕を受ける。それ（苦悩）を受けるから、また、別の、自らなされた苦とは別のものを生じさせる。⁶⁹それこれが、これらの諸想（あるいは、諸名称）によって、顯示されている。以上と相違するから、道理に随って、すべての白品は知られるべきである。その中で、この区別は、善行を先とする趣が善趣と⁷⁰言われる。樂を受けることが極まっているから、天界（樂世界）と言われる。

2-1-2-10. 漏尽智力を明かす

sarva'āsravāṇām aśeṣānuśayaprahāṇād yat tatprātipakṣikam anāsravaṃ cittam anāsravā prajñā paramādhicittādhiprajñasaṃgrhitā āsravāṇāṃ kṣayād anāsravā cetovimuktiḥ prajñāvimuktir ity ucyate. tāṃ punaś cetovimuktiṃ prajñāvimuktiṃ tasminn eva carame bhava pratyaṭmaṃ śaṣṭhyā 'bhijñayā darśanamārgasaṃniśrayeṇa bhāvanāmārgasaṃniśrayeṇa cādhigamya svaṃ cādhigamaṃ yathāvat prajānamti. pareṇa cākāṃkṣamāṇānām ārocayaṃti. tasmād drṣṭa eva dharme svayam abhijñayā sākṣātkṛtvopasaṃpadya pravedayaṃtity ucyante.

kṣīṇā me jātir ity evamādinām padānām nānākaraṇaṃ veditavyaṃ.
tadyathā paryāyasaṃgrahaṇyām.

(BBh 荻原 [1971]: p. 392.II. 8-19; Dutt [1966]: p. 270.I. 19-p. 271.I. 2;
磯田・古坂 [1995]: p. 374.I. 12-p. 375.I. 10)

すべての諸漏の中の、残りなき随眠を断じるから、対治するものが、無漏心であり、無漏慧であり、最勝の増上心と増上慧に包摂され、漏が滅尽するから、無漏なる心解脱・慧解脱と言われる。⁽⁷¹⁾その心解脱・慧解脱を、その最後の有(=生存)において、内証し、第六神通に関して、見道に依存して、修道に依存して証得するから、また、自ら証得して、如実に了知する。他の者たちのために願いつつあるから、説く。それ故に、現法において、神通を具足し、開覚し、到達して、知らせる、と言われる。⁽⁷²⁾私の生は尽き、と、以上等の諸句の区別が知られるべきである。⁽⁷³⁾例えば、「摂異門分」におけるように。

註

(41) サーガラメーガは註釈する。さらにまた、遍趣行(道)を如実に知ると言われる。それを説示するために、まさに彼らにとって、趣入門、云々。種類の勝解の有情たちが趣入する門のような遍趣行(道)である。すべてのものの自己の行に随順するからである。それ故に言う。食行者たちにおいて、云々。そのように、この時に遍趣の内容を知るべきである。

(BBh Vy: Peking [Ri.405.a.4-6], Derge [Yi.322.b.2-4], 磯田・古坂 [1995]: p. 359. II. 1-3)

(42) サーガラメーガは註釈する。二つの観点とは、後者の場合、遍趣の内容は、すべての、五種に趣くという行(道)であると言われる。三つ目は、二つ目の中で遍趣の内容による。以上のように、三つの観点によって、遍趣行(道)が説示されている。

(BBh Vy: Peking [Ri. 405. a. 6-7], Derge [Yi. 322. b. 4-5], 磯田・古坂 [1995]: p. 359. II. 4-5)

(43) サーガラメーガは註釈する。また、観点がある。相互に矛盾する、とは、各々の見解に執して住することである。それ故に言われる。種々の党類に依存する、とは、自己の見解に執着することによって、ある者は欲の見解と矛盾す

ることによって、他の者たちの欲と矛盾することによって、欲によって批判される。彼らの欲は相互に矛盾しているからである。靜論 [等] の各々異なる、とは、彼らのそれらの欲に基づく勝解は、この世と他の世の無罪を受け取ると言われる。それは、遍趣行 (道) と言われることによって、云々。

(BBhVy: Peking [Ri. 405. a. 7- b.2], Derge [Yi. 322. b. 5-7], 磯田・古坂 [1995]: p. 359. II. 6-8)

- (44) サーガラメーガは註釈する。その遍趣行 (道) はまた、カーラマ経に随順して知られるべきである。

(BBhVy: Peking [Ri. 405. b. 2], Derge [Yi. 322. b. 7], 磯田・古坂 [1995]: p. 359. I. 9)

「瑜伽論記」に以上の遍趣行 (道) 智力が総合的に註釈されている。「まさに彼らにとって、趣入門………カーラマ経等におけるように」とは、これは、遍趣行 (道) 智力についての知られるべきことを明かしている。四つがある。一には、帰趣を知る順観の行があり、二には、罪福の不同業趣を知る五趣の行があり、三には、朋党の各々が趣に順ずることの相違を知る見行があり、四には、余の一切の品類差別の、此の世・他の世の無罪なる趣の行があると、知る。つまり、三乗と不定性は、三世の中において、涅槃に趣く無罪の行を起こすと知る。

問う。この遍趣行 (道) の力と処非処力とに、どんな差別があるのか。

答える。処非処力は境 (対象) を寛く知る。遍趣行 (道) 力はただ、諸行には趣くところがあることを知るだけである。処非処力はそれ以外にも他の法を知る。つまり、大海の滯 (しずく) の数、大地微塵の一切有情の諸の心の念ずる対象、また、七宝の真偽等のことを知るのは、無量である。サンスクリット語でカーラマというのは、時のことである。外国には別に「時経」がある。

(「瑜伽論記」: 大正42. p. 583. c. 21-p. 584. a. 3)

- (45) サーガラメーガは註釈する。また、八つの自在について説かれる。種々の有情の集まり、つまり、云々。さらにまた、前のように、多種の [行] を、宿住において随念する。つまり、生をまた随念して、ということによって、七、八、九、十も随念して、多くの場合も、滅と成劫も正しく随念して、これらの自己と有情が、この場合、生において、以上のような名であり、生は以上のようなものである。以上のような生類であり、以上のような種姓であり、以上のような飲食であり、以上のような楽・苦の知覚であり、これだけの寿量でありうる。時はこれだけ住する。寿命の辺際はこれだけであり得るであろう。死後、そこに生じ、それから死後、ここに生じる、という種類を有する。部分を有する前の場所において随念しない。

(BBhVy: Peking [Ri. 405. b. 2-7], Derge [Yi. 322. b. 7-323. a. 3], 磯田・古

坂 [1995] : p. 361. ll. 1-4)

さらに、サーガラメーガは註釈する。あるところに住するそれを説示するために、種々の有情の集まり、云々。種々性も方位の区別によって説示するからである。東方と云々。先の過去の自体において、云々。諸有情の行の区別を説示するために、種々の名称の約束の確定によって区別された、と説かれる。八種の依り所を説示するために、八つの言説の依り所、と言われる。名称等の八つが、言説の依り所であると言われる。それに随順して、とは、それに住してはたらくのである。六種の行であるものとは、行じさせることによって行であると言われる。享受させて、得させるという意味である。そのように、過去の生の六種の行を多種として随念する。宿住において随念する、と説示されているのが含意である。言説の諸語は、經典に随順して説示されている。これは名であると言われる、云々。

(BBhVy: Peking [Ri. 405. b. 7-406. a. 4], Derge [Yi. 323. a. 3-7], 磯田・古坂 [1995] : p. 361. ll. 5-8)

- (46) サーガラメーガは註釈する。六種の行を説示するために、八つの言説の依り所に依存する六つの行とは何か。呼ぶことのための約束であり、云々。名称の仮説とは、これが名称であると言われるということである。類の仮説とは、生類、云々。父母の仮説とは、諸類である。飲食等の仮説とは、食物である。富と衰の仮説とは、楽と苦とを知覚することである。種々の寿命の仮説とは、長寿等の三つの種である。

(BBhVy: Peking [Ri. 406. a. 4-6], Derge [Yi. 323. a. 7- b. 2], 磯田・古坂 [1995] : p. 363. ll. 11-12)

- (47) サーガラメーガは註釈する。他と自、とは、過去の状態を必ず行じさせることであり、器に適合するために、六種の行を説くことに確定する。これは、私の名であり、とは、私の名が言説である。これは彼の名である、とは、他のものである。クシャトリアであり、とは、自あるいは他の言説である。彼の、とは、他のである。そのように他者たちにも結びつけられるべきである。これは、とは、自己である、と言われる。これ、とは、他のである。自己の飲食の作用、酪漿、あるいは、とは、自己あるいは、とは、自分自身である。あるいは、[この]とは、他の者たちである。このような仕方では、衰えたり榮えたりする、とは、楽と苦とである。私は、とは、私自身のである。彼、とは、他の者たちである。年齢において、とは、自分自身の種々の年齢が説示されている。彼、とは、他の者たちの、である。そのように、他と自との六つの行が説示されている。形象を伴い、指摘を伴い、という特定の内容を説示するために、この場合、言説の依り所、云々。

(BBhVy: Peking [Ri. 406. a. 6- b. 4], Derge [Yi. 323. b. 2-5], 磯田・古坂

[1995] : p. 363. l. 13-p. 365. l. 8)

サーガラメーガはさらに註釈する。甲が乙において、また断じられ、これは私の名であるということに基づいて、その自己から、ある人として生じる、とは、前の依り所が説示されている。依り所の区別とは、種類である。それ故に、諸世間をこのように説く。あなたはどんな依り所から来たのか、とは、問うているのである。他も前のように。

(*BbhVy*: Peking [Ri. 406. b. 4-5], Derge [Yi. 323. b. 5-7], 磯田・古坂 [1995] : p. 365. ll. 9-10)

「瑜伽論記」に註釈されている。宿住力の中で、まず総合的に標舉し、次に個別的に解釈し、後に略して結する。

「[これら] 八つの言説の依り所 [に依存して、] 六種の行 [を他と自のために説く]」(八の言説の句、六種の略行)とは、秦という人が言うには、略して六行を説くから、六趣の略行と言う。

「旧」(「菩薩地持経」)に「六種の同行」と言うのは、「同」という字と「略」という字と相みだれたので、謬って誤したものである。八種の事は言説となすべきである。故に八つの言説の句(=依り所)と言う。景という人が言うには、言説の所詮は広くいえば無量である。略すれば六行ある。

八の言説の中で、最後の三は、合して一のものである。寿量であるから。よって六だけである。「この故に、唯だこのような品類において、随念を發起し、さらに増えることがない」と言うのは、宿住力を明かす。前に念を起こすのに随って、さらに他の対象はない。

問う。宿住力はまた、自他の過去、無漏の滅道を知りのか知らないのか。

解釈して言う。今この論の中で、文に道理を説かないけれども、また知る。「法華経」に説かれているように。「過去に仏がおられる。威音王と名づけ、正覚等を成ず」と。(「妙法蓮華経」大正9. p. 50. b-c に類似の表現がある)

「言説の行は形象であり」とは、ここに説かれた六種の略行である。

「言説の依り所(句)は指滴である」とは、八つの言説の依り所(句)である。

「また、これに、随念があるから」とは、まさしく、宿住の随念力知を明かす。

(「瑜伽論記」: 大正42. p. 584. a. 3-16)

- (48) まず最初に、サーガラメーガは総合的に註釈する。その清浄な天眼は、人の過去の業に相應することによって、もろもろの死んだ有情と、生じた[有情]と、色がよい[有情]と、色が悪い[有情]と、貧しい[有情]と、富んだ[有情]と、善趣に行った[有情]と、惡趣に行った[有情]との諸業を如実

に知る。これらの有情は、身体によって悪く作られた、乃至、意によって悪く作られたものを有する。諸聖者に対して非難する。邪見の業道を受持して住することの因と縁によって、死んでそれから惡趣に墮ち、もろもろの地獄の有情として生じるであろう。また、これらの有情は、身体によってよく行じられた、と、乃至、前とは矛盾して善趣、天界に、天の中に生じるであろう、と。これは第九力である。

(BBhVy: Peking [Ri. 406. b. 5-407. a. 2], Derge [Yi. 323. b. 7-324. a. 3], 磯田・古坂 [1995]: p. 365. ll. 11-14)

まず最初に、『瑜伽論記』に総合的に註釈されている。次に、死生智力を明らかにする。[それは] また、天眼力と名づける。その中で、先に天眼力の観点から釈し、後に死生力について釈する。

(『瑜伽論記』: 大正42. p. 584. a. 16-17)

- (49) サーガラメーガは註釈する。この中で、天眼を説示するために、天住に含められるから、諸靜慮も、天の、と言われる。それ(天住=靜慮)に依るから、それについても、天眼と言われると説示するために、眼によって知られるべき色のよう、と説示されている。それについて説示するために、その果であるから、と。それらによって、二種の眼が説示されている。清淨な眼と慧眼とである。

(BBhVy: Peking [Ri. 407. a. 2-4], Derge [Yi. 324. a. 3-4], 磯田・古坂 [1995]: p. 365. ll. 15-16)

『瑜伽論記』に註釈されている。「この中で、靜慮は天住と言われる。乃至、天眼と言われる」とは、修得される眼は、かの靜慮に従ってまた、天と名づける。故に、天眼と名づける。三藏がお説きになる。光明であるから天と名づける。天とはこれは、光明という意味の下に經の中に釈する。

(『瑜伽論記』: 大正42. p. 584. a. 17-20)

- (50) サーガラメーガは註釈する。清淨である靜慮の果であるから、とは、神通を自性とする示すためであり、欲界繫の天眼を除くためである。これらも、正しい天眼ではない。生得であるからである。

(BBhVy: Peking [Ri. 407. a. 4-5], Derge [Yi. 324. a. 4-5], 磯田・古坂 [1995]: p. 367. ll. 6)

『瑜伽論記』に以下総合的に註釈されている。「極めて清淨である、と、人を超過した者である」の二句は、次に死生智力を釈する。その中で、初めに、死生のとき、見られる好惡の色相を明かし、後に、善惡行によって、苦樂処に往くことを明かす。その中で二つに分けられる。初めに、惡趣に往くことを明かし、後に、善趣に往くことを明かす。前の中に初めに、広く因果を釈し、後に、総じてこれを結す。

(「瑜伽論記」：大正42, p. 584, a. 20-24)

- 51) サーガラメーガは註釈する。また、二種の人を超過した者であることを説示するために、名称が相似しているものと、相似していることによって、それらの種性に属するものたちがあり、また、それらと相似していないものがあると言われる。また、人々において、それらと相似していないものがあるとは、また言われるが、人々において親しく似てもいない、とは、名称もない云々という意味である。欲界の人を超過した他の者たちにおいて、名称の相似があると説示するために、欲界繫の諸天において、名は相似している [だけの者があるが] 云々。

(BBhVy: Peking [Ri. 407. a. 5-8], Derge [Yi. 324. a. 5-7], 磯田・古坂 [1995] : p. 367. II. 7-8)

- 52) サーガラメーガは註釈する。臨終のとき、死につつあると言われる。死に直面しているからである。

(BBhVy: Peking [Ri. 407. a. 8], Derge [Yi. 324. a. 7- b. 1], 磯田・古坂 [1995] : p. 367. I. 9)

- 53) サーガラメーガは註釈する。中有にあるとき、とは、生じるときということであり、生に直面しているからである。

(BBhVy: Peking [Ri. 407. a. 8- b. 1], Derge [Yi. 324. b. 1], 磯田・古坂 [1995] : p. 367. I. 10)

- 54) サーガラメーガは註釈する。その中有にあるものも、二種である。善趣に行くものと惡趣に行くものとの区別による。それらは、趣の区別によって、色の区別があるであろう、とは、決定されていると説かれる。二つの種類に基づいて、と云々。あるよく作られた果に住して、悪く行うそれらは、惡趣に行くことによって、明白(白淨)なところから、陰(闇)に入るであろう。また、ある悪く作られた結果に住して、悪く行うそれらは、陰から陰に入る、ということによって、二種とも闇に入る、ということによって、黒い羊毛の光、と、例によって説示し、黒いものであるから、悪い色と言われる。

(BBhVy: Peking [Ri. 407. b. 1-4], Derge [Yi. 324. b. 1-3], 磯田・古坂 [1995] : p. 367. II. 11-13)

- 55) サーガラメーガは註釈する。二つの種類 [の因] に基づいて、とは、あるよく作られた果に住して、善い行いの業をなしたそれらは、白淨に入るであろう、とは、善趣に行くことである。

(BBhVy: Peking [Ri. 407. b. 4-5], Derge [Yi. 324. b. 3-4], 磯田・古坂 [1995] : p. 367. I. 14)

- 56) サーガラメーガは註釈する。それ故に、例も、極めて清白であることを説示する。清白であるから、好ましい色、ということによって説示される。それら

は、色によって行かれるべき、低と勝の場所に行くであろう。

(BBhVy: Peking [Ri. 407. b. 5-6], Derge [Yi. 324. b. 4-5], 磯田・古坂 [1995]: p. 369. l. 16)

- 57) サーガラメーガは註釈する。それはまた、戒によって善趣に行く者たちである。戒を護ることによって、天に生まれるであろう、と決定することによる。戒を破ることによって惡趣に行く者たちである。

(BBhVy: Peking [Ri. 407. b. 6-7], Derge [Yi. 324. b. 5], 磯田・古坂 [1995]: p. 369. ll. 17-18)

- 58) サーガラメーガは註釈する。それ故に言う。戒を壊し[それから]引きおこすことを有する者たちは、と[説かれる]。身・語による惡行とは、壊戒である。それを引きおこす、とは、意による惡行である。その同じものが壊戒である。經典の語とつながる。身と語と意による惡行とは、また、意による惡行を説示していても、聖者に対して誹謗する等の邪見を説示するべきである、と示すから、意による惡行を本性とするものは、邪見そのものである。惡行を引きおこすことは共通であっても、好ましくない果が起ることを見ないのは見であるからである。

(BBhVy: Peking [Ri. 407. b. 7-408. a. 3], Derge [Yi. 324. b. 5-325. a. 1], 磯田・古坂 [1995]: p. 369. ll. 19-21)

『瑜伽論記』に註釈されている。「戒を壊し」とは、身語の惡行である。

「[それから]引きおこすこと(等起)」とは、意の惡行である。

- (『瑜伽論記』: 大正42. p. 584. a. 24-25)

- 59) サーガラメーガは註釈する。また、邪見は二種である。聖者を誹謗するのと因果を誹謗するのとである。その中で、最初のものは、聖者を誹謗することであり、二番目はすべてを誹謗する邪見である。それと相似していない側に、聖者が確立される。仏陀と声聞とである。それ(邪見)を対治する無漏の見と結びついている。

(BBhVy: Peking [Ri. 408. a. 3-5], Derge [Yi. 325. a. 1-2], 磯田・古坂 [1995]: p. 369. ll. 22-23)

『瑜伽論記』に註釈されている。「彼に対して認められた異類に住する聖者を誹謗して、邪見が聖者への誹謗と言われる」とは、外道とは異類に住する者への邪見は、聖者を誹謗することである。

(『瑜伽論記』: 大正42. p. 584. a. 25-27)

- 60) サーガラメーガは註釈する。それらを誹謗するとは、邪見を、業と法とを受持して住することの因とする、という意味を説示するために、その邪見によって、云々。それ故に、[邪]因・[邪]果に執着する。それ故に、その邪業を造作する。邪見がその業を造作して、黒い方の法を受持して、二つを受持する。

邪見をその因として、道と法とを受持する。

(BBhVy: Peking [Ri. 408. a. 5-8], Derge [Yi. 325. a. 2-4], 磯田・古坂 [1995]: p. 371. II. 1-2)

- (61) サーガラメーガは註釈する。また、その縁を説示するために、また、その内容を説示するために、それ(邪見・壊見)とは別の種々の善法を具有していても、とは、それ(邪見・壊見)とは別の善本が存在していても、それ(邪見・壊見)によって、惡趣に行く、と言われる。それを因として、それを縁として、と云々。

(BBhVy: Peking [Ri. 408. a. 8- b. 1], Derge [Yi. 325. a. 4-5], 磯田・古坂 [1995]: p. 371. II. 3-4)

- (62) サーガラメーガは註釈する。身の破壊を説示するために、名と色とが更互に、云々。前に、名と色とが更互に依存して、依存してから結合していることから、乖離するから、とは、身の破壊と言われる。諸根(感官)を分解して識によって捨てる。

(BBhVy: Peking [Ri. 408. b. 1-3], Derge [Yi. 325. a. 5-6], 磯田・古坂 [1995]: p. 371. II. 5-6)

- (63) サーガラメーガは註釈する。すべての死の中で、その下卑な死が最も下劣である、とは、四種の死の中で、教化されない死であるそれが下劣である。それ故に、教化されないとは、死であろう、と。心は、厭離を生じさせるであろう、と言われている。最も下劣であるから、とは、教化されない死という意味で説示するためである。これらは、意味上引かれ、語と字によって引かれる。もろもろの生類は死ぬと決定されている。もろもろの死は、煩惱と結びついているときに生じるであろう。煩惱がないときは生じないであろう、と、この場合説示されている。

(BBhVy: Peking [Ri. 408. b. 3-6], Derge [Yi. 325. a. 6- b. 2], 磯田・古坂 [1995]: p. 371. II. 7-9)

- (64) サーガラメーガは註釈する。地獄の有情たちの名を説示するために、とは、特定の名を説示するためという意味である。惡趣とは、地獄という世評である。惡趣に墮ちる、というのも同様である。

(BBhVy: Peking [Ri. 408. b. 6-7], Derge [Yi. 325. b. 2], 磯田・古坂 [1995]: p. 371. I. 10)

「瑜伽論記」に註釈されている。「地獄の想を開示することによって」とは、有情に開示して地獄の想を生じさせることによって、「經」の中に、「險惡趣に墮ちると言われる」。

(「瑜伽論記」: 大正42. p. 584. a. 27-28)

- (65) サーガラメーガは註釈する。自性と体と事とを開示することによって、とは、

その自性とは、地獄と言われる。体とは自性である。他の自性に対して特定の作用があるからである。特定の他の特徴の依り所であるから、事とも言われる。それに依存して、それらの特定のはたらきがあるからである。

(BBhVy: Peking [Ri. 408. b. 7-409. a. 1], Derge [Yi. 325. b. 2-4], 磯田・古坂 [1995]: p. 371. ll. 11-12)

『瑜伽論記』に註釈されている。「自性と体と事とを開示することによって」とは、まさしく地獄の体と事とを開示することによって、『経』にまた、「地獄と言われる」ということである。

(『瑜伽論記』: 大正42. p. 584. a. 28-b. 1)

- (66) サーガラメーガは註釈する。その趣へ行く因は、極劣であるから、悪趣と言われる。それ故に言われる。非法行と、云々。法に相應しない側面であるから、法でないという意味である。その同じものが、自と他を害することに入るから、不平等行である。それは、それ(地獄)に行く道であるから悪趣と言われる。

(BBhVy: Peking [Ri. 409. a. 1-3], Derge [Yi. 325. b. 4-5], 磯田・古坂 [1995]: p. 371. ll. 13-14)

- (67) サーガラメーガは註釈する。苦触、云々。苦とは、諸悪趣のものである。samとは、集合である。sparsaとは、その集合そのものである。苦悩を受けることが平等に出現するから、とは、耐え難い苦を受けるから、悪趣と言われる。それ故に言われる。苦を受けることが平等に出現するから、云々。

(BBhVy: Peking [Ri. 409. a. 3-4], Derge [Yi. 325. b. 5-6], 磯田・古坂 [1995]: p. 373. ll. 1-2)

- (68) サーガラメーガは註釈する。下分に行くことによって、顕示(区別)されているから、また、救拔しがたい苦を受けることによって、憂悩(悲嘆)の大声を発して、墮ちると言われる。

大きく沈んで生まれることによって、地獄と言われる。

(BBhVy: Peking [Ri. 409. a. 4-5], Derge [Yi. 325. b. 6-7], 磯田・古坂 [1995]: p. 373. ll. 3-4)

- (69) サーガラメーガは註釈する。以上、業をなして、ある者が生じる。その者は、[苦悩]を受ける、という場合、苦そのものを、である。[その] 苦とは別のものを生じさせる、とは、未来の苦を生じさせる因の業をなすという意味である。そのような場合、極めて劣なる因と果によって、区別するから、そして、そこに生じている者たちの非難の(悪い)業が現行するから、それらに依存して、地獄の三種の名を説示する。さらに、因と異熟果と士用果の自在で説示される。

(BBhVy: Peking [Ri. 409. a. 6-8], Derge [Yi. 325. b. 7-326. a. 2], 磯田・古坂 [1995]: p. 373. ll. 5-7)

「瑜伽論記」に註釈されている。結論として述べる。「また、以上、ある者が生じる」とは、悪行、邪見等〔を有する者が生じること〕である。

「それ（苦惱）を受けるから、また、別の、自らなされた苦とは別のものを生じさせる」とは、地獄の中に生じ、先業の苦を受けおわって、また余業を起こし種々の苦を起こすと言うことである。

（「瑜伽論記」：大正42. p. 584. b. 1-5）

- (70) サーガラメーガは註釈する。以上と相違するから、道理に随うべきである、とは、これらの有悩は、身によって善行を具有している、云々。引きおこすことを有する戒の円満（具足）と、身と語と意によって善行を具有している。二種の見の円満等は、また、前に示されるのと相違している。因性も果性も、特定のものと知られるべきである。それ故に言われる。善行を先とする趣、云々。

（BBhVy: Peking [Ri. 409. a. 8- b. 3], Derge [Yi. 326. a. 2-4], 磯田・古坂 [1995] : p. 373. ll. 8-9）

「瑜伽論記」に註釈されている。「以上と相違する」以下は、第二に、返って、法善趣を顕す。

（「瑜伽論記」：大正42. p. 584. b. 5）

- (71) サーガラメーガは註釈する。前のようにさらに人々が滅することによって、無漏の心解脱があり、慧解脱によって、この同じ時に、自己に対して自己によって、神通を現証して、入定して住する。他の者たちにも説示する。自己の生は滅したということ、乃至、これとは別の生存は知れないというに至るまで。これは如来の第十力である。すべての諸漏の中の、残りなき随眠を断じるから、ということによって、漏の滅があるという意味を説示している。無漏心とは解脱心であるという意味は、欲の対象に執着することから離れているであろう、とは、解脱心である、という意味である。欲漏と有漏を断じるからである。無漏慧とは、慧解脱と言われる。無明漏を断じるからである。その二つの増上心の学と増上慧の学として確立されるべきである。最勝の、とは、完成を説示するためである。

（BBhVy: Peking [Ri. 409. b. 3-8], Derge [Yi. 326. a. 4- b. 1], 磯田・古坂 [1995] : p. 373. l. 10-p. 377. l. 1）

- (72) サーガラメーガは註釈する。その最後の有（＝生存）において、という意味とは、法性が見られる場合、と言われる。自ら、とは、自己自身によって、という意味である。第六神通に関して、とは、漏の尽の神通という意味が説示されている。また、それは、見〔道〕と修〔道〕によって断じられるべき煩惱の対治道によって包摂されている、と説示するためである。見道に依存して、云々。自ら証得して、と言うことによって、自分自身によって神通によって現

証するという、その意味を説示している。他の者たちのために願いつつあるから、と言うことによって、それら二つ（自利利他）の意味を説示している。それ故に、云々。

(BBhVy: Peking [Ri. 409. b. 8-410. a. 4], Derge [Yi. 326. b. 1-4], 磯田・古坂 [1995]: p. 377. ll. 1-3)

『瑜伽論記』に註釈されている。「その最後の有（＝生存）において、内証し、第六神通に関して」とは、景という人が説く。阿羅漢の人は漏尽通を得、最後心に住するのを内証と説く。仏の漏尽力はまた、金剛心の後において仏智が起る時を内証と説く。

遠師が説く。我が生が尽きる等の四の如実知道は、これは証智である。意味内容に従って四と説く。すなわち初めに証智を起こすとき、尽智を得るから、我が生が尽きると名づける。無生智を得るから、後有を受けない。『成実論』もまた同じである。（『成実論』大正32. p. 372. b-c に類似の記述がある。）＜景師の説は、仏陀に関してはポジティブな仏智が起ることを最終的涅槃とするが、遠師の説は、ネガティブな涅槃論である。＞

（『瑜伽論記』：大正42. p. 584. b. 6-11）

- (73) サーガラメーガは註釈する。諸句の区別、云々とは、私の生は尽き、と第八[地]に入る。私によって梵行という行がある、とは、道を正しく修習することによって、退転がない。作用をなし終わったとは、すべての結（煩惱）を断じることによって、道果を持つことを得る。これとは別の生存は知らない、とは、七有（七つの生存）（地獄・畜生・餓鬼・天・人・業・中の七有の称。五趣の果とその因を数えたもの。）等が滅しているのである。

(BBhVy: Peking [Ri. 410. a. 4-6], Derge [Yi. 326. b. 4-5], 磯田・古坂 [1995]: p. 377. ll. 4-5)

（参考文献）

BBh (*Bodhisattvabhūmi*).

* 荻原 [1971]: 『梵文菩薩地經』山喜房.

* Dutt [1966]: N. Dutt, *Bodhisattvabhūmi*, Tibetan Skt, Work Series 7, Patna.

* 宇井 [1961]: 宇井伯寿, 『梵漢対照・菩薩地索引』(鈴木学術財団).

BBhVy (*Bodhisattvabhūmivyākhyā*).

* *Bodhisattvabhūmivyākhyā*: Sāgaramegha (Rgya-mtsho-sprin). Peking. No. 5548, Derge. No. 4047.

BBh (Bodhisattvabhūmi) & BBh Vy (Bodhisattvabhūmivākyā).

- * 磯田・古坂 [1995]: 磯田熙文・古坂紘一, チベット仏典研究叢書 第三輯 チベット仏典研究会.

「瑜伽論記」.

- * 「瑜伽論記」: 大正42. No. 1828, 遁倫 集撰.
- * 「国訳一切経和漢撰述部」論疏部十, 「瑜伽論記」勝又俊教訳 大東出版社.

キーワード 「瑜伽師地論」「菩薩地」, 十力, 遍趣行智力, 宿住随念智力,
死生智力, 漏尽智力